HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	帯広畜産大学
Citation	高等継続教育研究, 2, 98-117
Issue Date	2003-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51800
Type	other
File Information	Obihirochikusan-2.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

3　帯広畜産大学

日　時　　2002年7月31日　10：00～12：30
場　所　　帯広畜産大学学部棟会議室
話し手　　渡邊　芳之　氏（帯広畜産大学助教授）
　　小池　正徳　氏（同助教授）
聞き手　　姉崎・光本・相川・石山・上田敦・大嶋・金澤・川瀬・佐藤・白取・滝ヶ平・布上・松浦



渡邊　芳之　氏

渡邊　この2年間、僕らの大学はかなり大規模な改革をやってきました。将来構想検討委員会を中心にやってきたのですが、その委員会では部局長クラスの教授のほかに助教授・講師が最初は 4 名、今は6人参加していまして、改革の素案づくりとか、実際の新カリキュラムの運営とかは助教授以下が中心にやっています。その点で、僕たち助教授クラスでお話した方が実情に近い話ができると思いまして、そういうふうにしました。

姉崎　私たちには特に農学出身のメンバーがいるわけではないので、畜産大の専門分野については素人ですが、畜大自身がいろいろな経緯の中で自立していこうという選択をされたり、聞いている範囲では、地元の農業高校との連携など、視点が少し社会連携や今の大学改革に行きますけれど、全体のこれまでの改革の歴史や、今抱えている問題などについて最初にお話していただきたいと思います。

渡邊　渡邊と申します。この大学に来て4年目です。担当は心理学です。教養に当たる心理学と教職課程の科目をいくつか持っていますが、専門も新しいカリキュラムではいくつか持つ予定です。前は北海道医療大学の臨床心理学専攻におりまして、臨床心理士の養成をやっていたんですが、僕はずいぶん前から心理学専門ではない人に心理学を教えるという心理学教育に興味がありまして、その実践も兼ねてここに来たのですが、たまたま来た時期が悪くて、大学改革の時期に当たりまして、前任校が私学であったことが災いして、私学の経験も踏まえてということで、大学改革のいろんな委員会に来て1年目くらいから入れられてやってきました。そういう意味では外から入ってきてここの改革をやるという立場になりましたので、割と客観的にこの大学を見てくることができたと思います。僕も畜産の専門的な話はできませんが、地域との関係とか、特に北海道の中でのこの大学の位置づけについては客観的な見方ができていると思います。

　こちらの資料に今度やりました改革の大体の内容が書いてあります。今年の9月に運営諮問会議という会議がありまして、その改革の説明用の書類です。この4月からできるようになったことを書いてあります。

研究・教育組織の改革

渡邊　今回の帯広畜産大学の改革の大きな柱は、一つは教育研究組織の改革、そしてカリキュラムの改革、そして、それらを支えるための畜産フィールド科学センターですとか、学部教育センターとか、センター組織の設置を行いました。

　研究組織の改革については資料の 1 頁に、「教育と研究のゆるやかな関係構築」というキャッチフレーズが書いてあります。どういうことかといいますと、どこの大学でも基本的に同じだと思いますけれど、従来、国立大学では、学科・講座体制をとっていて、そこで学科・講座というのは、

教育と研究の両方について統一的な責任を負ったわけです。大学の教育の内容とか教育方法とか社会との関係が比較的安定している時代には、がっちりとした教育研究組織があって、それが教育研究に責任持っている体制は歴史的にはよかったと思います。ですが、最近のように大学での社会からのニーズもすごくどんどん変動的になってくる、研究内容の先鋭化もどんどん進んでいくというときに、社会の側からは、例えば、教育に対しては幅広い教養だとかそういったものを求められて、研究の方は反面すごく専門化した研究が求められるようになってしまって、簡単に言うと、研究主体になってしまうと教育がうまくいかないし、教育を主体に組織をつくると研究がうまくいかないというジレンマをどこの大学でも抱えていると思います。

僕たちは、小さい大学であるというメリットを最大限に活かすという点で、そういう組織改革はやりやすい面がありますので、今度は研究組織としての講座と教育組織としての学科の組織というものを基本的に分離する、それぞれが自立して組織改革をするという制度をつくってみました。

ただ、先生方は専門でお詳しいと思いますけど、法的なことや制度上のことで学科・講座をなくすことはできませんでした。文部省と交渉はしました。筑波方式とか、大学院重点化をしている大学の組織に近いものを、重点化していない大学でつくれないかということも考えて交渉したのですが、やっぱりできないということでした。学科講座の組織は残しつつ、実質的な研究教育の分離をどうやって実現するかということを考えて、今回の組織改革をやっています。

大雑把にいいますと、一つは、これまで縦割りに分かれていた学科を統合して一つの大きな学科にして、教育面でも研究面でも学科内ですと改組は比較的容易にできますので、今後容易に改組ができるようにしたことと、学科内でも講座の組織をこれまでよりもずっと緩やかで大きいものにしました。

3 頁に新しい研究組織・教育組織の表がございますけども、獣医学科の方は今までは学生定員 40 人、教官 30 人、10 講座で 3 人の小講座制だったのを 4 講座に再編しています。一方、畜産化学科のほうは教官 100 人以上いるのを 3 講座に再編しました。40 人以上の巨大講座ができました。まず、この講座の内部で研究室縦割りになっていた研究体制を、自由に講座内部であれば動けるようにしました。

一方、教育組織では、下の方にありますように、これまでやっていた教育の専門分野単位でユニットというのをつくりまして、このユニットに学生が所属しているという教育体制をとるようにしました。ユニットと講座との関係についてなんですけれど、ユニットについては所属講座と関係なく各教官がその教育能力に見合ったユニットの教育を行うという体制をとりましたので、その間を結ぶものとして学部教育センターという組織が設置されたわけです。その学部教育センターは、研究組織の方が今度教育組織にあった構造になっていませんので、その教育組織を学部教育センターが統括して、研究組織、講座の方からどの教官がどのユニットを担当し、どういう科目を担当するかということを、学部教育センターの権限で決めていく。もちろん最初からそういうことはできませんが、長期的な考えとしてはこの学部教育センターにもかなり大きな権限を待たせて、極端な話、教官本人の希望とは違うようなことでも教育上の必要があれば配置するようなことができる権限を持たせていきたいと思っています。それができるような制度にはしてあります。

これが大まかな教育研究組織の改組なんですけども。学部教育センターの内容については次の頁に書いてありますのでこれをご覧いただければ分かると思います。これはセンターの名前で設置しましたが、学内措置のセンターで、建物も部屋もありません。それぞれの会議が開催されているだけです。教育担当副学長がセンター長ということになっています。

4 頁の機構図のところで、センター運営委員会があって、それから教育運営部、事業改善支援部、学生支援部とありますが、教育運営部というのは従来の教務委員会の機能を持ってきてあります。単科大学ですので、従来大学全体の教務は全部教務委員会で決めていたのですけども、その機能を教育運営部に持ってきてあります。その中には教育分野ごとの連絡会議を下へつくるというかたちをとっています。学生支援部というところに従来の学生委員会・学生部の機能を移行して、従来は別に動いていた就職なんかもここに一括して、学生の就学支援・就職支援・発達支援の面まで、こ

こで一括して行うようになっています。学生相談室もここに入っています。授業改善支援部は今回新しくつくられた分野で、学生による授業評価、教官による授業評価、授業評価の集計と、授業評価の結果に基づく授業改善に支援を行う部署としてつくってあります。

僕たちの大学では学生による授業評価を 4 年前に初めて実施して、今年度からは、毎学期必ずすべてやるようにしています。今も 14 年度の授業評価を実施中です。「多元的業績評価」というシステムを導入しまして、その中の教育評価の中には学生による授業評価も入れてあります。

基盤教育・共通教育

渡邊　授業改善の部分は、一昨年から FD 室をつくりまして、その FD 室でやってきたものを学部教育センターに移行してきて、力を入れるということで、僕は、学部教育センターでは主に授業改善支援の部分を担当してやっております。

次に、カリキュラムです。教育と研究の分離に伴いまして、獣医学科外以外これまでは畜産管理学科、畜産環境科学科、生物資源科学科の 3 学科があったのですが、それを統一して一つの畜産科学科にしました。平成 14 年度については、入試の変更がまだ間に合いませんでしたので、3 学科別々に入試を受けて入ってきた学生が、一つの学科に所属しております。来年の入試からは畜産科学科一本の入試、畜産科学科と獣医学科の 2 学科制の入試を行えるようになります。

これまでは入学者は学科毎の教育内容を見て、学科毎の教育内容を希望して入ってきていたわけですけども、入学してくる学生の傾向の大きな問題点として 2 点ありまして、第一に、獣医学科を受験して合格しなかった人が他学科に大量に流れてくるということです。これは、畜大の獣医学科を不合格で流れてくる人がすごく多いですし、北大とか、他の獣医学科に合格しなくて流れてくる学生もかなりいます。アンケート的な調査をやって調べてみると、入学者 210 人のうち少なくとも 80 人がどこかの時点で獣医学科志望だったものを受験前に成績などで志望変更した学生ですし、受けてみて受からなくて、極端な例ですと 3 浪して受からなくてついにあきらめて、という人がかなりありました。それがまず一つの問題です。そのことが、今まで学生の就学意欲にどちらかというと悪い影響を与えたという面があります。

もう一つは、入ってくる学生が農業・畜産の就職をめざしていないということがあります。今だと教育学部を受けても教職をめざしていない人がいるのと同じようなことなのですが、僕たちの大学の場合は、農畜産学の専門職業人養成にすごく強い大学なのに、そこに漠然とした将来像しかもってなくて、特に農畜産の仕事を全くしたくない人が入ってくるんですね。面白いんですけど。最初からそういう仕事する気はなくて、獣医には何となくなりたくて、獣医がだめだから近いところで畜産というような。そういう学生は将来の展望はほとんど何も持ってないです。興味がないので農畜産学についての基礎知識も持ってないです。

そういう人たちが受験して入ってくることは、何の基礎知識もなく将来像もなく受験して入るときにどの学科を選ぶか、何で選べるかということなんです。そうすると、イメージです。畜産のイメージは牛と馬です。競馬が好きだから、牛乳がおいしい、そういうレベルで入ってきます。そうしますと、従来の学科で言うと、例えば、畜産管理学科だけが馬ができるので、他の環境学科は関係ありませんし、生物資源科学科にいたっては、ほとんど分子生命系の研究が主な研究内容になっていますので、入ってくるときの学生のイメージと入ってきてからの学習内容にすごく大きなギャップがある。ところが学科に分かれているとそのギャップが固定されたままその上級学年まで進んでいきます。そうすると、最初のイメージとぜんぜん違うコースで、特に成績のあまり優れていない学生は最初のイメージとはぜんぜん違うやりたくもない勉強を 4 年までさせられて卒論をさせられるから､学習意欲はすごく低くなっていますね。そういうことが従来から問題になっていたんです。

学科を統一したのは大学経営上の理由もありますが、もう一つはそういう“獣医くずれ”の人と何の目的意識も持たない人の教育はどうやってできるのか、ということです。その人たちをみんな獣医農畜産の専門人として社会に送り出すことが、理想的なかたちです。

それをどうやって実現できるのかということで、アドバンス制という教育システムをつくってあります。このアドバンス制の教育システムでは、入学時にはどの専門分野に進むということは全く決まっていません。畜産科学科に全員同じ立場で入

ってきます。1・2 年次では基盤教育・共通教育と名づけた教育分野の教育を主に受けていきます。基盤教育というものがいわゆる教養教育に一番近い内容です。具体的には語学、コンピュータ、自然科学系の基礎知識、生物・物理・化学、あと農業経済がありますので経済学、これも基盤教育の中できちんとやっています。もう一つが、もっと狭義の教養教育に当たります人文社会系の科目、これらが基盤教育の科目に入っています。共通教育というのは、農畜産の教育なんですけど、農畜産の教養教育というような位置づけだと思います。

これまで、僕たちの卒業生を受け入れてくださる企業ですとか農協とかの現場も結構多いのですけれども、そういうところからの意見としては、畜大を出ているのにタネのことを何も知らないとか、搾乳もできないのかということですとか、そういうことを結構言われます。社会から見れば、畜産大学卒ということは、農畜産の幅広い知識を持っていて、農業や畜産のことさせるんだったらとりあえず一通りできるんだろう、という見方をされるのですが、普通の大学と同じように、専門分野によってぜんぜん違うわけですね。例えば、生物資源科学科に入学したら、おそらくサークルでもやらない限りは牛には一度も触らないですよ。今まではそうでした。それどころか、動物を一切触らない畑も一切行かないで 4 年間という学生も 2 割かそのくらいはいたと思います。そういうことが畜大に社会から期待されている人材育成ということともかなり矛盾するわけです。

そこで、どの展開教育のユニットでどういう専門分野に進むかに関係なく、基本的な農業と畜産の知識と体験は全員につけてもらうという趣旨で共通教育を設けています。後ほど見てももらえると思いますが、全学農畜産実習というのが共通教育の目玉科目です。全学農畜産実習では獣医も参加します。獣医も畜産科学科も全員が最低一度は牛に触る、羊の毛刈りにも行きます。あと、畑で芋ととうもろこしと枝豆とトマトを主に育てています。それから搾乳実習。朝 6 時に農場に行って搾乳する。これは僕たちもつきあわなくてはいけないのですが。明日あさっては当番なんですけど、朝から搾乳実習している心理学者は日本で僕だけかと思います（笑）。それから、土壌学なんかの講座もありますので、土掘って地層を見たり、バターづくり、アイスクリームづくりなんかも、農場の施設でできますので、全学農畜産実習などでやっています。それだけでなく、農業関連の幅広い基礎知識的な科目を共通教育に配置しています。

獣医学科では少し違いますが、畜産科学科ですと、一年生の授業の中には展開教育に当たる部分はありません。基盤教育と共通教育だけです。ですから、いわゆる教養教育と農畜産の基礎知識だけを一年生のときに学びます。一方、展開教育というものは、先ほどお話したユニットごとの幅狭い専門教育です。先ほど研究が先鋭化が求められているという話をしましたけど、同じように専門の知識や技術というのも相当な先鋭化を求められていますね。学部卒でもある程度学習内容や専門内容を指定して求人も来ます。そういうところが求めている専門知識は、かなり狭い先端の専門知識で、そういう部分をこの展開教育で教育しようということです。

展開教育では、いわゆる家畜生命科学ですとか生産科学ですとか、いろいろ分かれているのですが、ここに学生がどうやって進んでいくのかという仕組みがこのアドバンス制の一つのポイントです。

先ほどもいいました通り、入学直後の学生は、どこのユニットに進むのかということは何も決まっていません。ただ、みんなはイメージがありますから、くりかえし希望調査をやるという形式をとっています。希望調査をやりながら、みんながどういうことを希望しているか、自分の希望は何かということを考えながら上級学年に進んでいくというかたちをとって、入学直後にまず 1 回目をやっています。そうしますと、九つのユニットの中の家畜生命科学と家畜生産科学の二つに 4 割以上の学生の希望が集中しています。その次が生態系環境科学ユニット、これは自然保護と野生動物です。一番多いのは牛や馬なのですが、次は野生動物をやりたいというのが希望の第 3 位くらいです。この三つをあわせると、過半数の学生が三つのユニットに集中したのが最初の段階です。

その後の教育でどれだけばらけていくかということです。この三つに集まるということでも、最初はイメージで選んでいるのがすごく強いということが分かります。牛や馬をやりたいという学生が牛や馬のことを知っているわけではないんですよ。何にも知らないです、実際問題ね。それを基盤教育・共通教育を教育していく中で、他の分野

もいろいろ面白いんだよということを知ってもらって、できれば 2 年後期から完全にユニットに分属していくんですけど、そこまでにばらけて、理想をいえばきちんと定員でうまくはまればいいなということで考えています。

全学農畜産実習の中にはできるだけすべてのユニットと関係した実習内容を入れるように努力しています。初年度ですので、まだできないこともあったのですが、例えば土壌学の地層を見るということを入れました。土壌学関連のユニットは、生態系環境ユニットか地域環境工学ユニットあたりになるんですけど、そこら辺のユニットに希望する学生は、実習後どっと増えるんですね。その分野の実習をやると、その分野に行ってもいいという学生が増えるんです。全部の分野の実習とか知識をきちんとつけてあげれば、最終的にはそんなに偏らずに分散するんではないかという期待を持っています。

段取り的にこれからどうやって進めていくかといいますと、2 年前期でユニット仮分属があります。仮分属という後で変更可能な分属を 1 回させて、2 年後期でもう 1 回本分属で分属させるという方法をとりたいと思っています。1 期生はそれでやると思いますが、1 年後期の 10 月からやる授業で展開教育入門という授業を共通教育の中に配置しています。これは、展開教育の各ユニットから 5 コマずつ出てもらって、週 3 回開講します。全部のユニットが紹介ができるように行います。実習や基礎科目で、農畜産の他の分野も面白いのかなという意識ができたところに、各ユニットではどんな教育内容なのかということをビシッと教えて、それが終わったところで仮分属申請をしてもらう。そこできれいに分かれてくれればそのまま本分属まで行きますし、もし偏りがあった場合は仮分属では希望のユニットに最大限分属させて半年間ユニットの教育を受けた時点でもう一回見直し、そのときにはある程度成績で縛りを入れて仮分属したユニットでがんばった人たちだけが希望のユニットに残れるようなかたちをとることにします。

最初はできるだけ希望を入れてやろうと思ったのですが、実際に担当する教官の数も限られていますので、ある程度絞っていかなくちゃならない。それで成績でやろうと考えています。基準になる成績は 1 年からの基盤教育・共通教育の成績を重視するということを考えています。ですから、最初から一生懸命やった人は自分の希望のユニットに行ける確率が上がるよ、ということはすでに指導していますので、その結果、授業の欠席率はかなり下がっています。成績評価の方式も変更しまして、今までは履修届を出しても履修しなかったら空欄にするような評価をしていたのですが、今年からは履修届を出した科目については全部点数をつける。1 度も来なければ例えば 0 点、それを将来のユニット分属のときの成績評価の中にとっておいて、とらなかった科目だと 0 点になって平均値が下がるというかたちをとりましたので、みんな厳選した科目をとって、とった科目にはがんばって出るというかたちがかなり今年の 1 年生に定着しています。これは副次的な効果ですけどかなりよかったと思います。

あとは前期終わっての休学者数が去年の半分です。例年、獣医希望で 1 浪程度でここに来た学生は、やっぱり獣医を受けたいと言って休学・退学していく者がかなりいたのですが、今年はそういう学生がかなり減っています。これも、最初から現場に出て、自分は獣医になりたくて泣く泣くここに来たんだという意識から、獣医以外の農畜産もなかなか面白いのかもしれないという意識への転換が進んでいるのだろうと思いますが、別の要因もあるのかもしれません。

導入ゼミ

渡邊　もう一つは、基盤教育の中で少人数ゼミ方式の「導入ゼミ」を導入しています。従来は普通の大学のように入ってきたらばらばらで語学のクラスがあるくらいで、クラス単位の動きがほとんどないのが大学一般だと思うのですが、今度の 1 年生からは全員を 30 人くらいのクラスに分けて、そのクラスに 3 人ずつ「支援教官」という担任が配属されて、その 30 人で語学も動く実験も動く、農畜産学実習も動くというかたちで、高校のクラスみたいなのをつくったと考えてもらえば分かりやすいと思います。そのクラスの中での団結や友達関係もうまくできて、従来の形式ですと、本当に誰ともつきあわなくてもやっていける状態だったのが、クラスの友達とある程度の人間関係を結んでいかないと、実習なんかだと分担でいろんな作業がありますので、できないというかたちができてきて、僕たちが一番危惧したのはそのストレ



スに耐えきれないという学生が出てきたらどうしようかなというのがすごくあったんです。クラスの行事とかで何かさせられるのがいやだという学生もいますよね。特に、ある種のメンタルな問題を抱えた学生の場合に、強制的にクラスの共同作業に参加させるということがストレスにならないかということを危惧していましたが、今のところ、はっきりそういう相談はないですし、そういう理由での休退学もないですし、それほど心配したほどのことではなかった。もちろん隠れた部分もあると思いますが、今のところの実感です。むしろ、プラスの方向で困っている子がいたら助け合うようなことができてきているんじゃないかと思っています。

小池　戻りますけれども、2 年後期にユニット分属すると、一応教養教育の高学年への配置ということも一つの課題になりますので、基盤教育、共通教育の科目も一部、3, 4 年生で配置してありますが、結局できたのはほんの一部で、実際には 3 年後期になるともう卒論に入っていきますので、その展開教育のユニットに分かれて、それで卒論を中心とした教育を受ける。それか、職業教育の教育を受けるというかたちになっていきます。それがだいたいのこのアドバンス制教育システムの概要ということになります。

畜産フィールド科学センター

渡邊　次に、畜産フィールド科学センターです。今日も中をちょっとのぞいたりはできると思うんですが、これは従来の附属農場です。

農学部がある大学はみんな附属農場があって、北大もありますよね、あの場所で農場はすごくもったいないと思っているんですけどね、一等地ですよね。あそこは畑つくっていていいのかな(笑)。僕らはもういくらでもありますから、ここはもう町外れで、帯広市稲田町というところなんですけど、ここはもともと帯広市じゃないんです。もともと河西町という帯広の隣町の中です。ですからここは帯広市郊外につくられた大学なんですね。それが昭和 30 年代の町村合併で河西町が帯広市と合併して帯広市内になったので、もともとここは何にもなかったところです。

後で通りかかって見えたらお教えしますけど、うちの学校の隣には何があるかと言うと、火葬場です。火葬場って普通どこにあるかということですよね。一番近い建物は火葬場なんですけれども、そういう場所に創られた大学ですから、土地だけはたくさんあって、もともとこの土地は国で買った土地と、あとは向かいが帯広農業高校ですが、農業高校が持っていた土地を分けてもらったんです。それから近隣の農家から寄付された土地ではじめた大学です。近隣の農家から寄付されたり買い取った土地があって、歴史的にそうした土地で農家が耕作することを黙認していたり、まあ、いただいた土地ですから。そういうことがあって、今度の独法化で、境界線を決めてそれをやらなくちゃいけないのが、今すごい大変な問題になっているんです。どこまでか分からない。お互いにお借りしていますけれども、いいですよ、みたいな感じで (笑)。だから、うちの大学の敷地になっているんだけど、そこには農家の畑で芋をつくっていますというところがあるんですね。そういうところこれからどうしていく、独法化によりどうしていくのか。

光本　一種の入会地ですね (笑)。

渡邊　本当にそうで、そういう点でも、もともとこの地域の支援を受けてできた大学だということがあります。

それで今度その農場を改組しました。農場を改組した一番大きな理由は、一つは教育面で、全学農畜産実習ですとか、学生を実際現場に立つ実習、それから現場と結びついた、専門教育でも現場と結びついた教育というのを重視するかたちにカリキュラムを変更しました。それで、学生が今までよりかなり農場に出て行く場面が増えてきたんですね。そのときに、農場の側は今までは単純に農場の畑とそれから牛舎とかその生産施設があって、それを事務的に統括しているだけで、学科から出て行って借りて使うというかたちで、農場には教

育、研究の機能というのはほとんどなかった。農場専任の先生が 2 人いますので、その先生はそこで研究活動はやっているんですが、大学の中での位置づけとして農場は教育、研究を担当しているんじゃなくて、ただ場所を管理しているという色彩が強かったです。それが今度教育面でそういうことがある、それから、後でもきっとそういう話題になると思いますが、研究面でも地域との協力、地域の畜産業との協力ということが重視されてくると、教育、研究を直接サポートするような機能を農場に持たせるということが具体的に必要になってきました。

改組というのは、他の大学と同じで、文科省に改革をしていますというのを見せるためという面ももちろんあったんですが、特に今度の 14 年度改組は、必要に基づいた改組がうまく文科省が求めるそれと一致したという点で、わりとラッキーなものになりました。文科省が後押ししてくれて、これがもし文科省から改革しろという強制力がなかったら学内だけではこの改組はできなかった、うまくそこはかみ合ったのはラッキーでした。

そこで、戻りますけれども、従来の附属農場に、従来、農場の他に学科が持っている生産施設があったんです。例えば肉畜処理施設が 6 ページの図にありますが、肉畜処理施設、要するに、ハムやソーセージをつくる工場、それは生物資源化学科に所属していました。それから、農業機械実習研究施設があって、要は農機具の工場です。これは畜産環境科学科に所属していました。機械系がそこにありましたので。そういうふうに他にも、羊小屋と羊がいるんですが、これも学科に所属していて、農場の所属ではありませんでしたし、あと、鶏もありますし、屠畜場もあります。

数えるとかなりの数のそういった生産系の関連の施設が学内に分散していて、それが、一言で言ってしまえば研究室の持ち物になっている。例えば機械工場というのは、この講座の物だから他が使いにくいというようなことがずっとあったんですね。それを全部、そういったものを全部この附属農場にくっつけてしまって、それで、どこの学科、講座からでも、あるいは、どこの教育ユニットからでも平等に利用できるように、というかたちをとったのが、今度の畜産フィールド科学センターです。

このセンターの設置と同時に、従来の畜産管理学科、今度の畜産科学科から、教授を 1 名異動しています。教授 2 名と助教授 2 名の 4 人体制の専任教官で、それから、兼担のかたちをとって、およそ 30 人くらいだと思いますが、30 人の教官が畜産フィールド科学センターのスタッフとして名前を連ねるかたちにしています。ですから、今後附属農場や生産施設を使う実習というのは、実習の計画とかカリキュラム上の位置づけというのは学科の方で考えるんだけど、それを計画と一緒に、畜産フィールド科学センターに委託して、畜産フィールド科学センターの業務として実習を行うという、理屈上はそういうかたちをとるかたちになりました。

うまくいっています。特に農場の先生方のモラールというか、職業意欲がすごく向上して、今までは本当に附属施設で、つけたしみたいな位置づけがすごく強かった感じがしたんですが、今はもう、学内の教育研究の中心施設だというふうになりましたので。みんながんばりすぎて、目の下にくまをつくっているんですけど。

搾乳実習というのは 250 人が全員が朝行くんですが、これ 1 日じゃ済まないんです。搾乳というのはけっこうやってみると大変で、観光牧場みたいなところでちょっと触って絞ってみるっていうんならいいんですが、我々の場合は、もしかしたらその搾乳の仕事をするかもしれない学生を育てるので、例えばまず、衛生管理のことがすごく大事です。観光用の牛だったら例えば乳房炎おこしているようなものとかも絞らせて、もし死んでもいいですよね。まあ、いいとはいえないけど、でも、実際農家だと乳牛一頭死ぬって大変なことなんで、例えば乳房炎なんかの触ってみて絞ったときの最初の乳の色なんかで乳房炎検出するとか、そういうレベルの教育も一緒にやらなくちゃいけないので、最低 2 日、やっぱり農場の、フィールド科学センターの先生がはりきってくれて、2 日やんなきゃだめだってことで、そうすると 250 人が 2 日ずつ朝行っているんです。

それで前期は土曜日までずっと休みなしです。8 月 3 日の土曜日で終わるんですけれども、土曜日まで毎朝 6 人ずつ行って、その担当の先生は前期 1 日も休まず朝全部です。僕らは自分のクラスの学生の時は行って手伝うんですけれども、その先生がいないとできない。

こんな負担で来年できるかはちょっともう疑問

なので、来年は見直して、もうちょっと実習の内容を増やして選択したりしてうまく回す方法を考えなくてはいけなくなったんですが、ただ、そのくらい現場が意欲もってくれるようになりました。今まで学生の教育みたいなことは、ほとんど関係ないような感じだったのが、学生の教育にフィールドセンターの先生方が本当に積極的に参加して、無理してくれるようになったのはすごい成果だと思います。

この畜産フィールド科学センターは、後ほど見に行くと思いますが、研究面でも、地域共同研究センターというのがその地域や企業の研究との研究連携を繋いでいるんですが、そこで入ってきた研究をじゃあどこでやるのかというと、農場でやりますから、それまで地域共同センター、僕らは地共センターと呼んでいるんですが、地共センターとフィールドセンターとの連携の中で、地域連携の研究が行われるというかたちがとられています。

それから、この間、外務省から表彰されたんですけれども、国際協力で、うちの学長が直に外務大臣から表彰されたんですが、地元新聞には載ったんですが（笑）、JICA とか、他にもいくつかの──JICA は農業に限らないものですけど──いくつかの農業の国際教育協力の機関があります。そういう機関の教育をかなり引き受けています。それの教育のフィールドというのはやっぱり、フィールドセンターなんです。

将来的には、概算要求で建物建てるときは別に実績ないとつくれませんので、JICA の実績をこれからもうちょっとあげていって、フィールド科学センターに宿泊施設なんかも併設するような、外部からの一時交流みたいのでやるような教育をできる設備をつくっていきたいと今思っています。

それから、これは先の話になりますけれども、農業のリカレント教育みたいなことの場として、宿泊施設や教育施設を使ってフィールドセンターでそれを実施していくってことも視野にいれています。ですから、ある意味でうちの大学の一つの大きな夢がこのフィールド科学センターにのっかっている。

意思決定システムの改革

渡邊　次に、今度は先ほどちょっと触れました、教員の評価システムなんかもふくめた大学の意思決定機構なんですが、今回の改組の過程で我々が理解した文科省のやりたいことというのは、要するに、比較的少数の経営陣で意思決定できる大学づくり、ということだったと理解しています。その方向でやりました。

ただ、うちの大学はですね、やっぱり、先生方の北大と根本的にちがうのは、やっぱり“小さい”ということなんです。例えば僕ら教員同士はみんな顔を知っています。先生方、他の学部の先生の顔を知らないでしょ。僕ら、ここの大学の教官で顔と名前一致しない人というのは本当にすごく少ないです。原虫病センターとかに来ている先生で、一部、僕知らない人いますけれども、学部の教員だったら全部顔と名前一致しますし、会えば挨拶するようなところです。

そういうところですし、あとはもう一つの特殊事情として、うちは大学院博士課程がない大学のくせに自校出身の教官がすごく多いんです。学部が帯広畜産大学出身の先生というのが、だいぶ減りましたけど、それでも今でも 4 割以上はいると思われます。そうするとね、そういう先生方は、学生寮があるんですけれども、学生寮出身で全部学生寮の上下関係で全部繋がっていて、そうすると、教官同士でも寮の後輩だと「お前」ですよ。そういう関係なんですよね。

おもしろいんですが、研究面では助手が勝手な研究やっていてもなんにも言わない風土が強く、助手さんにも全部研究室、個室を与えて、今年からは助手さんも予算は別立てにしました。この話も後でしますけれども、全員個人予算としたり、そういうことができる風土の一方で、人間関係的にはですね、上下関係とかですね、そういうなんていうか、浪花節的な関係があるところで、ですからもともとその意思疎通とかリーダーシップとかはできやすい風土でした。

今までも、実際の意思決定を教授会がやっていたかというと、今までだとうちの場合は総務委員会というのがあって、そこは、5〜6 人しか出席しないんですが、実質的にそこが決定機関で、教授会はもう承認するだけでした。あとうちは教授会はいまだに教授だけなんです。助教授以下は参加しないで。そういう点でも、教授会の意思決定の権力というのはもともとそんなに大きくなかったですね。それを実際に実体化するかたちで運営戦略会議というものをつくりました。これが独法化

後は評議会に移行していくのかなと思いますけれども、この運営戦略会議というのは、ここには詳しいことは書いていませんが、学長、副学長、それから事務局長、それから学科長ですね、それプラス、学長が任命した教職員ということですが、今はそれだけでやっています。基本的にそこだけで意思決定できるようにしてしまいました。

特に今回重要なこととして、人事と予算の問題、これは今回今までと大きく変わったんですけれども、これまではやっぱり、常識的な大学の一般的なかたちとしては、学科に欠員が出たらその学科が後任人事を行う、講座に欠員が出たら、その講座が欠員人事を行う、基本的には補充人事しかないというのがこれまでのかたちだったんですが、これを欠員が出たら一回全部運営戦略会議に上げるかたちに変更しました。運営戦略会議に欠員が一回預けられて、どこの学科講座にそのポストを使うかということを運営戦略会議が決定してから、その採用が決定した分野に採用が任されるというかたちをとるようになりました。

もちろん、実態としては今後も、補充人事が中心でやるのは当然なんですが、大学の運営上、戦略上必要があった時に、補充人事をとりやめて、そこの講座は無補充で、別の講座、学科にそのポストを動かすということがある程度できるようにした。予算面もそうです。

予算面も、予算の配分については今までは学科代表から組織された予算委員会が配分決めていたんですが、これも運営戦略会議が大枠を決めて、その上で予算委員会が配分を決めるというかたちをとることにしました。実際上は従来通りの運営がされてくいと思いますけれども、制度としてそういうかたちをとったのは今回すごく重要なことだと思います。

あと、予算面では、従来教官に研究費というかたちで一括して配分されていたお金、これを研究経費と教育経費というのに分けました。従来教官に配分されていた研究費というのは、教育用に使うお金と研究用に使うお金が両方入っているんだよという理解で我々やってきたわけですが、これをはっきり分けて、具体的には授業負担の大きさや、その他授業に対する学生の評価で教育費を増減する、傾斜配分する。研究費についても、研究業績の達成状況なんかで増減する。極端な話、研究はやっていなくても教育面で大きな負担している先生にはそれなりの金額がいくし、逆もまたある、というようなかたちが制度上はできるようになった。ただ、今年度は従来通りの配分になるようにと現在調整中ですけれども、制度上はそういうことができるようになりました。それに伴って予算が全部個人配分になった。今まで講座に配分していたようなかたちも一部あったんですが、全部個人配分にする。どうしてかと言うと、評価が全部個人単位の評価になりますので、配分も個人単位でないと、論理的には一貫性がないので、そういう風にしています。

その評価の中心になるのが、多元的評価システムです。7 ページの下に概念図が載っていますけれども、これもどこの大学でもそうですし、僕も今まで他の大学でもそうでしたが、教員の評価というのは研究の評価、研究業績の評価が常識だったわけですけれども、僕たちの大学は、今後どうなるか分かりませんが、いわゆる研究大学ではないという認識は、僕たちははっきりもっています。それでその中で、研究大学、研究重点化の大学ではない大学で研究だけで評価するのは適当ではないことは誰でも分かることですが、それの変更が今までできなかったということです。

今度は、この多元的評価システムで、研究だけではなくて先ほどから言っているような研究業績の評価、それから教育の評価、先ほどいいましたように、教育負担と学生からの評価その他の授業評価が主なものであります。それから、後二つ足しています。一つは社会貢献です。今までも社会貢献は評価されなかったわけではありませんが、はっきりと評価することは今までいえなかったんですが、これについてもいろいろな基準を設けて評価するかたちを今度とりました。それから最後が、これけっこう重要だと思うんですが、管理運営の評価です。今までは学内で委員会をたくさんもったりとか、それから大学改革関係の業務をやったりすることを業績評価の面でもきちんと評価する。これもかなり詳しく委員会を序列化して、負担の大きい委員会、そうでもない委員会、全部序列化して、この委員会を何点、何点という点数にしてあります。ですから、私は将来構想検討委員会というのをやっていて、これ、5 点ですね、5 点と言うと、査読論文 1 本分くらいの点数、だからもう論文書かなくてもよくなったんですね。それは冗談ですけれども。

そういうかたちで、他の面でもそうです、全部点数化して、もちろん点数は逐次改定していくんですけど、一応、最初に点数を決めて、一つすごく重要なこととして、教授になれる点数と言うのと、助教授になれる点数というのを決めました。教授は過去直前 3 年間で 50 点とかですね、正確な点数はちょっと忘れてしまったんですが。例えば、教授になれるのは 50 点、助教授になれるのは 30 点とか決めました。もうその基準で人事がこの 4 月から動いています。ですから、研究も教育も社会貢献も管理運営も貢献してない人は昇格できないかたちをはっきりとったんです。

研究評価とか教育評価の面でも、これまでの論文中心はまあ、研究評価の場合論文中心はもちろんですが、臨床経験なんかも教育研究の中にきちんと評価するかたちをとります。これは特に獣医学の臨床教育の評価という面で、現場のお医者さん、現場での臨床経験ある人に教官として入ってもらうことが必要で、実際にもう一人来ていただいているんです、ずっと獣医師会なんかで活躍された先生で、開業されている先生に来てもらったんですが、そういう先生、当然論文なんか少ないわけですよね。それでも獣医なんかだと現場で開業されているお医者さんでも、文系の我々の普通の教員の業績よりはあります、本数はね。それでもやっぱり他の先生と比べるとうんと少ない。そこで、臨床経験の年数を論文何本かに換算したりとか、そういう方式をこの中に入れています。

だいたいこんなところが、この 4 月から動き出した改革の内容ですけれども、何でも。今お話ししなかったことでも、質問いただければそれに応じて知っていることであればお話しできると思います。

光本　ありがとうございました。畜産大が精力的に改革にとりくまれていることはホームページにも、最近お出しになられた 60 年史にも書いてありましたので、われわれもつかんでいたのですが、やっぱり中での狙いですとか、実際の効果ですとか、そういったことを今日のお話で大分うかがえましたので、よりリアルな認識をわれわれも持つことができたと思います。参加者の方で何かありますか。

単位互換

上田敦　学外での大学との連携というかたちではどういうことがあるのかなと思ったのですけども。単位互換といったようなお話で、釧路教育大と北見工業大学との間で単位互換をされているということを聞いたのですけども、実際それはどう行われているのかということと、学生はどういうふうに使っているのか、あと目的も教えてくれたらいいなと思っているのですが、お願いします。

渡邊　単位互換の目的は、どこの大学でも基本的には同じだと思います。各大学で充当できないような教育内容について互換して、という点では僕たちも同じです。かつ、僕たちの互換の 3 大学ですと、それぞれ単科大学だという事情がありますので、やはり教育内容の広がりが少ないわけですね。その面で、教育内容の広がりを得させるという目的は他の大学に比べての特色、目的だと思います。

ただ、これに関してはあまりいい話はないんです。まず、距離がものすごく離れていますので、通常の授業の単位互換はまず不可能です。釧路まで行くとしても、電車にのって一時間半かかります。来られたから分かると思います。そこで、水曜日の何講目に行ってなんてことは絶対できないです。北見の方も同じです。北見は 3 時間かかりますね。実質的にやっているのは集中講義の単位互換だけです。それでも実際には行かないですね。今年度の実績ですとごく少数です。あんまりダメだダメだというと問題ですが、うまく行っていない、希望する学生が少ないんです。そこへ行って、向こうへ宿泊しないといけないですよね。宿泊費用も学生の負担になりますのでできないのと、専門分野がものすごく違うので、うちの学生が興味をもってとれる授業が向こうにはないし、向こうの学生が興味持ってとるような授業がこっちにはないということもあります。ですから、もっとそれぞれの学生が興味を持つような授業を学生にとって便利なかたちで互換するように、何か抜本的な対策をとらないと、かたちだけではダメというのが単位互換の話です。

釧路には船に乗って海に出る実習があって、それにはうちから何人も行っているんです。でも、それだけですよね。それは釧路で聞いていただけたらすぐ分かると思います。それは人気があって申し込んでも全員行けないと言っていました。うちの大学に来るような学生の興味や志向性とあった視点で海に出て何かするというのがあるから行くんで、北見には行ってないでしょう。来てもい

ませんしね。

姉崎　衛星テレビでもやるということは？

小池　SCS は獣医の方ですね。獣医中心にやっています。獣医はリアルタイムで SCS を、これは北見、釧路ではなく、他の大学の獣医学科、獣医の方の連合大学院、岐阜、東京農業大、岩手等で行われています。

渡邊　そっちの方は結構実績はあります。前期後期 1 科目ずつやっていますね。そして、その場で向こう側にいる学生に質問をしたりとかやっています。実際に運用上はできます。

SCS の問題としては、設備がない部屋ではできないので、うちの大学では設備が今、50 人くらい入る部屋が一部屋しかないので、人数が多い授業はできません。実際に有効利用するにはもう少し予算をつけてもらって、SCS 設備のある教室を増やしてもらわないとできない。

今後道内の大学の連携では重要になってくると思うんです。うちも単独生き残りをめざしていますけども、教育面で他の大学との連携なしにできるとは思っていませんから、ここの大学でやらなきゃできないことは重点化するけど、例えば、単位互換でできることについては、どんどん単位互換していくというのはうちの基本的な方針としてありますので。

ただ、そういう話になると、すぐ教養教育をそれで、という話になるのですが、畜大では、畜大の教養教育をというのはかなりはっきり考えるようになりました。将来のことは分かりませんので、どこかの大学と合併したりいろんなことあるかもしれませんけども、ここで教育やっている限りでは、教養教育も全部ではなくてもここでやっていく、例えば北大とくっついたら、教養は全部北大で任せて…なんてことは言わない。北大もそんなこと考えていないと思いますけれども。ただ、うちの大学の中で北大とくっつきたいと考えている人たちの中にはそういう考えがあるんです。教養教育は北大に任せて、教養の教官を削ったり専門にしたりっていう。僕は札幌にもいたので、北大の教養教育がどんなに大変か大体分かっているんで、もう 200 人受け入れてくれって言っても絶対受け入れてもらえないことは分かるんですけども、ここにいると分からないですね。

うちの大学の場合、先ほど説明した共通教育の部分というのは、農畜産の教養教育なので、大学の統合・合併がどんなことになろうが、共通教育の部分については絶対外せないですね。ここを外して専門教育だけやるという場所になったら、それはもう大学じゃないと思いますね。そういう点でも、できるところについては単位互換や SCS でどんどんやっていきたいけれども、できるかできないかということに関しては、その大学の教育理念がなければ決められないですよね。うちの大学がどういう教育をやるのかという教育理念があって初めて、これは互換にしていいか悪いか、うちでやるかやらないかという判断ができるので、その基準はこの 1、2 年でうちの大学でももてるようになってきたと思います。その上で心理学いらないってことになれば…（笑）。

改革の推進力

姉崎　研究組織と教育組織の大幅な改編、しかも始まったばかりで構造改革と言っていいくらいの激震が走ったと思うんですけども、そのときに従来方式でいいと言う先生と、変えるべきだということで、合意をつくるときにみんなそっちに行こうというふうに働いたのは、先ほどの学生の意欲のことがありましたけれども、それが一番大きい要素ですか？

渡邊　学内の雰囲気としては、生き残りです。いろんな客観的な情勢から言って、この大学が単独生き残りというのは誰から見ても厳しいわけですけれども、うちは出身者も多いですし、地域とのつながりも強いから、大学への愛着がある先生も多いです。名前はどうなるにしろ、帯広で教育研究を続けていくために、例えば文部省がやれと言ったことはやる、大学の中の悪いことを変えていくってことに対する同意はわりと出やすかったと思います。他の大学で同じことをやるのとかなり違う。生き残るためにこれをやらなければいけないという説得というのは、かなり力がありましたね。

先ほどいいました通り、僕ら教官はみんな知り合いなので、個人的な人脈というのがすごく役に立っています。公に説明して文章で何とかというのはもちろんありますけど、僕ら改革をやる側の教官が個人的に説得して説明していくことがかなり広範囲にありましたし、後はその間に学長選挙が 2 回あったのも結果的にプラスに働きました。つまり、学長選挙が改革の方針に対して信任みたいなかたちをとるということがありましたので。

改革になったのは、佐々木前学長の選挙公約が、まずここへ残ることと、大規模な教育研究改革することでしたから、その公約の実現ということがあったわけです。佐々木学長は病気で引退になったんですけども、今の鈴木学長選出のときも、誰もそうははっきり言わなかったんですけれども、選挙戦は単独で生き残るか北大と連携していくかというのが争点になっていきましたから、そこでも学内の意思があるということが示されるという場面があったんです。それもそういう意味ではプラスに働いていると思います。

姉崎　文科省との関係でいうと、いくつかの要請上、縦割りの打破というのが一つでしょうし、それから研究教育組織の区別というのもあり、競争的な評価システムというところは文科省のグランドデザインの中にあると思うのですけど、ただそれだけに押されなくて、実質的な教育の内容をとりいれるとか、今まで光を当てられなかった活動について光を当てて、むしろ積極的に中身をふりかえるという作業をされていたと思うのですが、それはどのレベルで議論されていたのかというお話を少し。

渡邊　どうしてそうなったのかと言うと、やはり危機感だと思います。例えば、北大だったら、文科省の言っているかたちの改革だけやっておけば、とりあえず切り抜けられますよね。教育研究組織の内容の改善はできなくても切り抜けられますけど、僕らの大学では、言われた構造改革だけをやっていたってやっぱり生き残れないんです。言われた構造改革をやって、文科省から嫌われないようにするというのも大事なんですけれども、それに伴って、社会から評価される研究教育ができなければやはりいずれダメになるという危機感がありました。これは、教授から助教授、講師、助手クラスまで一致して危機感があったんです。そして、危機をどう打破するかということについてはいろんな考え方や方法論がありましたけれど、とにかくいい教育して、いい研究しなければこの大学は残れないんだ、という意識は強くあったんですね。そこで、かたちだけじゃなくてということはありました。

それからさっきも言いましたが、僕らがある程度やりたいと思う改革のビジョンと文科省のビジョンとの間の整合性がある程度あったのはラッキーだと思います。ただ、先生さっきおっしゃった



教育と研究との分離という話については、これは僕ら文科省から何も言われなかったです。僕らみたいな学部中心の大学院重点化じゃない大学では、そういうことを文科省は考えてなかったです。これはかなり議論になって、さっき言いましたけど、完全分離まで考えて、学科講座制の廃止というプランを最初に持ってったんですけど、これは絶対ダメだと言われましたし、それからその他の部分も、学生は学科に残すけれど、教官は学科をなくしてという話もダメでした。ようするに、学科があって講座があってそこに教官が所属するってかたちは大学院重点化でない大学では絶対守らなければ、これははっきり法律上ダメと言われて、その中でどうするかということで、今のように逃げをいっぱいつくってやってきたという経緯があるんです。ラッキーだった面も多かったですけども、そこは僕らの方に危機感がかなりあったということが一番大きかったと思います。

それから、先ほども具体的な説明をいくつかしましたけれども、うちの教育・研究の問題点という意識も、われわれの中にかなりありました。いい教育していないんじゃないかっていう不安はすごくあって、特に、私立大学との比較で考えたときに、せっかく農学系で考えたら優秀な学生を集められるようになっているのに、優秀な学生に見合った教育はできているのかという不安はすごくあったんです。それが改善しないと将来がないというのはありましたね。

姉崎　基盤教育、共通教育、展開教育と行って、特に2番目の共通教育や3番目の展開教育である程度人数が均等にいけば望ましいということになるんですけれども、ユニットごとに定員は残しているんですか。

渡邊　定員はおおよそにしています。定員を定めな

いと教育の計画を立てられないので、大体一番少ない所で 15 人ですかね、大きい所で 30 人です。

ただ、定めた定員の仮分属の段階で 4 割、本分属の段階で 2 割多く受け入れる余裕を持っています。ですから、あるところに集中すると、場合によると誰も来ないユニットもありうるんですね。それも従来の学科で考えると、学科の再編はそう簡単にはできませんが、僕らの新しい方式だと、新しい学生が誰も何年も来ないようなユニットは廃止できるようになるというわけです。このことも、先生方の意欲、今までだと、学生に人気がなくても自動的に配属された所でも、今後は誰もこないという、誰も来なければ、補充人事に限らなくなっているんだから、教官定員も削減されていくことが起き得るということです。いや、そうならないのがもちろんいいんですけどね。

姉崎　三つの人気集中ユニット以外では、学生獲得のための教育というのは相当…。

学生による授業評価

渡邊　だんだんそういう感じになってきていますよね。授業や実習が学生を集める大切な場ということを認識してもらって、だからこそ、授業評価も深刻ということです。

金澤　学生の授業評価のこととか実際に評価するときのアンケートか何かありますか？

渡邊　後ほど差し上げますが、マークシート形式の用紙をつくりました。こまごました、板書はどうかといった質問項目と、全体としてこの授業をとった満足度などの項目が 10 点満点であり、これが重要視されています。学内の反発はものすごく強いのですが。

金澤　教授の側ですか。

渡邊　若い助教授でも怒っている人はいます（笑）。そういうことに慣れていない先生ほどやっぱりそうだし、この前北大の高等教育センターの方に来ていただいたときにもうかがったのですが、学生に授業の良し悪しなんて分からないんだっていう主張が強くあるわけですね。

話し合いをして、みんなの同意を得てやっているのではないです。勝手に導入して、勝手にやることにしちゃって、今回の改革はかなりそういうところがあります。だから、かなりストレスを抱えてやっていることは確かです。学内で不満はたくさんありますけど、ただ、みんな不満は持っていますけども、さっきの話、やらなきゃダメなのかなっていう人が大半です。大賛成ですという人はごくわずかですね。

金澤　学生側からも、授業に反映されるというかたちになって、意識が変わったりしたのですか。

渡邊　いや、まだそれが学生に発表されてないですから。結果そのものが学生に何も知らされていなかったし、評価をやって、何に使われているかも全く知らされていないと言うか、実際使われていなかったわけですから。とるだけです。

文科省の方からやれというのがあって、アリバイ的に最初は始めたのですけども、あとは、とってみたら、結果があまりに分かりやすすぎる、発表できないということがあったんです。だから、返す時もそんなに見やすい返し方をしていなかったです。渡された教官も統計調査の出力そのものが与えられるくらいの感じで、今年から少し改善したのは、ちゃんと評価結果を知らせるための用紙をつくりまして、この項目はこういう点で平均から比べてこの程度ということを知らせて、全員に返すようにしました。

今年の大きな課題は、結果をどういうふうに学生に発表するかは今もめています。一切発表なんか困ると言う人から､全部発表しろと言う人から。僕らの意見としては、シラバスに昨年度の評価を載せろというのが僕らの意見ですけども、それはものすごく反発が大きいですね。でもやっていきたいですね。

ただ、学生さんの側から見て、質問の趣旨からしたら、その意義を分かって意欲をもってくれるということまではまだ行っていないです。今回やったことの結果で何がどう動くのかということを学生に見ていただいて。実際に毎年とっているけど何も変わらないじゃないかって、みんな書いてくる。何に使われているか分からない、かつ学生にも負担ですよね。そういう批判は学生からもあるので、緊急の課題です。

姉崎　学期の終わりにですよね。

渡邊　終わりの 1 回、今回だと 8 月 2 日までの学期で、7 月の 2 週からやっています。

姉崎　北大でも、公表するかどうかまだ最終決定はできないんですけれども、何人中何番というのは来ます。

渡邊　こういうことが実際にあったのですけれども、学生の方が、評価をするなら、自分もちゃんと出



小池　正徳　氏

なくてはいけないんじゃないかという意識を持ってくれました。やっているだけで、自分もちゃんと真面目に出るという学生もいますね。そのように、学生の学習意欲を高める効果をもたせるためには、やっぱり結果がどう使われているかということがきちんと分からないといけないのだと思います。

姉崎　次に成績評価システムの厳格化も導入するということですか。

渡邊　先ほどの、失格を空欄にしないで点数化するというのが第一歩です。学生の成績表をきれいにするということで、受験しなかった科目については最終から履修しなかったことにするのを止めました。ただ、GPA の導入ですとか、そういった具体的な評価の厳格化っていう問題についてはまだとりかかっていません。

姉崎　北大は、GPA 導入の議論と、教官が直接電算入力をやるということをやっています。

渡邊　入力するとデータベースに入るということですか？それは心配ですね。

光本　心配です（笑）。

別科の役割

石山　帯広畜産大学の別科という存在がありますよね。で、それについてはこちらにも少し記述がありますので、その部分について少し詳しく教えてください。

渡邊　別科の問題は、別科改革専門委員会座長から話を聞いてあります。

国立大学の別科は、うちと千葉でしたかね、残っているのは農学系ではそれだけです。あと芸大などにはいろいろありますけども、特にうちの場合は、今おっしゃったように地域との関係で言うと、地域の農業後継者の育成という点で別科が果たしてきた役割はすごく大きいです。例えば、農協の副会長だとか組合長だとか、農協の理事なんかに別科の卒業生でなっている人が何十人もいるんです。十勝管内の農業関係、それから自営でやっている人なんかでもかなり力を持っている人がうちの別科の卒業生です。

ですから、地元の別科に対する評価はすごく高いです。今度の一連の大学改革で、別科がもしかしたら廃止かというようなことがあったときにも、帯広市をはじめ、市長さんもうちの卒業生ですけれども、とにかく反対です。それこそ下手をすれば、学科はなくなっても別科はなくなってはいけない、というくらいです。

学部は、今は地元の人がほとんど入らないんです。今年は 3 人くらいですかね、十勝管内で。去年は 7 人くらいです。240 人分の。十勝管内だと帯広柏葉とか三条とかありますけど、そういうところはみんな東京にいきますから、地元にはほとんど残らない。そういう意味で、地元の農業の畜産への貢献というのはもちろんあるし、もう一つは、農畜産に限らず地元の高等教育の受け皿という位置づけはすごく大きいです。高校卒業してから、札幌にいれば大学に行ける子が、十勝だと大学がないから行けないんですよ。札幌だったら例えば偏差値 40 台くらいの大学もありますよね、そういうところに自宅から通える子が十勝だと通えませんよね。ですから、下宿するだけの経済的な力がなければ、大学進学をあきらめなくちゃいけない。じゃあ専門学校があるかと言うと、専門学校もすごく少ないです。人口の比で考えたらすごく専門学校も少ないところです。そういう意味で、その中で定員 30 人の別科が十勝管内の高等教育の受け皿として持っていた価値というものはすごく大きいです。

農業高校の一番とか三番とかいう十勝の農業後継者のエリートをうちの別科が受け入れて実践的な教育をしていることが、いまだに役立っていると思うんです。そういう点で廃止してほしくないということはすごくあるんですが、問題点もすごくあるわけです。

最大の問題点は、別科というのは、大学でもなければ、短大でもなければ、専門学校ですらないんです。今、専門学校から大学への編入はだいぶできるようになりました。もしこれが専門学校で

あれば、うちの学部3年に編入することができますし、だんだん大学進学率が高まってきて農業の畜産経営者で大卒が増えてきている中で、農業後継者のエリートが大卒でも専門学校卒でもない、要は高卒の学歴ですよね、それでいいのかということは、農業後継者本人たちの間でもあるわけですよね、大学に行こうと思えば行けるのに、わざわざ畜大別科に行って高卒の学歴になってしまっていいのかということはありますね、このことの解決策ということについてはずっと前からみんな考えてきたんですが、文部省との交渉の中では、とにかくできない、法律を変えないとできない。法律変えないとできないというのはだめという意味ですよね。

光本　法律を変えないとできないというのは、別科の位置づけですか、編入の問題ですか。

渡邊　編入の問題ですね。だから、編入の法律を変えるか。

光本　地元には専門学校化せよという意見もあるとうかがっていますけど。

渡邊　それもですね､法人化後は分かりませんけど、少なくとも去年、一昨年の文部省との交渉では、国立大学は附属の専門学校を持つことはできないといわれました。だから法的には行き詰ってしまって、そのままになっています。

小池　昔は農業改良普及員や人工授精の資格はとれた、今はそれも取れない。二年間実地は学ぶんですけれども、出るときにそういう資格がない状態なんですよ。

姉崎　かつて医学部附属看護学校とかそういうものがありましたね。

渡邊　看護専門学校は3年ですよね。

光本　ええ。そうすると、別科だと就業年数が足りないということもあるわけですね。

小池　先ほど最初にでましたけれども、うちの大学は2年、なんですけれども、千葉大の別科は1年なんですよ。

渡邊　また看護ははっきり国家資格がありますから、内容でできますけれども、うちにはそういう対応するものが何もないわけです。

小池　昔は改良普及員の資格がとれたんですが。

渡邊　今は大卒じゃないととれない。それでどうするかということで、委員会が立ち上げられて、地域の意見なんかも聞いて話し合ったんですが、結局、一言で言っちゃうとどうにもならないので、とりあえずこのまま残して、教育内容を改善しつつ、独法化後を待とうというのが今の現状です。

独法化後はいろんな解決策があって、帯広市の方もですね、これに関しては独法化後支援ができるようなかたちがなにかあれば、帯広市が例えば財政支援なんかをしつつ、専門学校化でもなんでも新しい取らせるようなことも視野には入れているんですが、独法化がどうなるかというのは、今全く分かりませんよね。制度的なことは分からないので。

光本　大学が別法人を経営することも可能というようなことも調査検討会議の最終報告書かれていますけど、それにしても財政基盤の問題がありますよね。

渡邊　そうですね。ですからとりあえず、これは公式の報告だからいいと思うんですが、ちょっと話は戻ってしまいますが、需要はあるとは言ってもですね、今 30 人定員持っているんですけど、定員がけっこう埋まらないんですね。順調に埋まってはいないです。それで、ちょっと変ないい方だけど、学習意欲の低い学生も来る。そんな子はほとんどいないんですけれども、どこにも行き場がないし、大学にもいけないからというようなことで来るような子も。定員割れてはいませんけど、割れ寸前になってくると誰でも入れるようになってしまっていますので、そういうことの問題があるので、定員は少し削減するという方向で答申は出ています。出ていますけど、まだ決まったわけではないです。

姉崎　あと、予算の編成上、別科だとある意味ではオプショナルな部分であるので、文科省が組む予算では、学内で独自の措置をしなければいけないとか、教員の配置はないわけだから、そのための独自なサービスを学内でやらなくてはいけないですね。

渡邊　すごく難しいんです。例えば教官ポストのことで言うと、今、1 人別科のポストがあるんですが、別科を存続していって、独法化後もそれに見合った交付金が得られるかどうか全く不透明です。まあ､どちらかといえばだめな可能性の方が高い。だけどその別科の先生をただ切るわけにはいきませんよね。

議論の中で出てきた案としては、別科の教育内容を四年制の中に取り込んで、もっと現場の農業後継者向けの学科の教育課程をつくったらどうか、

ただ、それやっても今別科に来ているような人たちは入れないんですよ。やっぱり国立大学に入るというのはそれなりの難関ですから、だからその入試制度なんかも含めて考えていかないと難しい。

同じことは推薦に関してもいえて、農業高校との関係でいえば、学部で受け入れすることになるのは推薦なんですが、推薦は、成績の悪い人でも、農業高校出身で意欲のある人柄的にいい子を入れているんですが、入ったあと授業について来れないことは往々にしてある。専門は大丈夫なんですけど、語学とかですね。農業高校は週に1時間しか英語がなかったりするわけで、そういう子たちがきちんと授業についていけてないという現状で、それでまた、そういう人をたくさん増やすようなことをしても、もちろん補習教育とかいろいろ対策は考えているんですが、とにかく入ってきたときの学力差がものすごく大きいので、それを埋めるというのはそうそう簡単にはいかない。

小池　それから、地元からももっと推薦を増やして地元から入れてくれとか学内にも農高からもっと推薦を増やしたらどうかという意見ありますけど、そのとき、特に教育をどうするかというのが根本的な問題なんですね。逆に学内に教育水準の低いコースをつくればいいのかと言うと、そんなことはできないと思うんですよ、同じ学部の中で。そこらへんも難しい。

ですから、そんなに簡単にどの方向を考えても簡単にいかないのが別科なんです。地元の高等教育、十勝の高等教育機関としての畜大の役割というのはそこがすごく難しいですね。

姉崎　AO入試は。

渡邊　まだ動いてないです。検討中です。

光本　そもそもこの地域に存在している高等教育機会が帯畜大のみで、多様な制度を保障できてないことの矛盾があって、別科問題として現れている。

渡邊　ですから長期的にはここにこの大学がもし存続して残れたときには、そういう地域の高等教育を負担する機関としての責任もどうやって果たすのかということはかなり深刻な問題になってきますね。

今、うちの生き残りというのは、とにかく獣医・畜産に特化することで、独自性を出して生き残るというので突き進んでいますけど、僕はそれに関してずっと学内では違う意見を持っていて、地域の生涯教育ですとか、若者に対してこの大学の専門じゃない分野の教官や教育システムを起用できる部分というのが、例えば、放送大学のスクーリング受け入れるとかね、そういうようなことをうちがやっていかないと、地域とは結びついていかない。

十勝と言うと、農業、畜産といいますけど、十勝地方の人口 40 万のうちで、農業、畜産に従事している人なんていうのは、本当に少ないです。畜産に関していえば3千戸くらいしかないですよね、確か畜産農家って。それが6人家族だとしたって、そんなもんですよ。人口のうちの。もちろん、産業として、農業、農畜産が重要なのは確かだけど、地域そのものとして、ここは別にみんなが農業、畜産やっている地域なわけではない。やっぱり一番多いのはサービス業で、そういう人たちの高等教育への要請というのは、農畜産への要請ではないですよね。

ここもそういう意味では矛盾しているけど難しい。どっちもやらなくちゃいけないですね。専門大学としての特色をだしつつ、地域への生涯教育の貢献というのも両方やらないと、長い目では生き残っていけない。やろうとは思いますけれども、それに対しては今のところ何の対策も考えていない。今はとりあえずこれを切り抜けることしか考えてないところですけどね。

それから、新しい学部をつくってくれという話は地域から相当ある話です。ずっとそれはあって、けれども、まだそれは国立大学がなくなるなんてことは考えもしなかった時代にはそんなことはやらんと言って、ずっと知らん顔してきて、新聞なんかに「十勝大学構想」なんていうので多分出ていると思いますけど、歴史的には、最初は畜大に何か、経済系、経営系の学部をつくってもらって、それを地域で支援して、という話だったのが、畜大がまったく参加しないっていう姿勢だったみたいです。僕がいない時ですから分かりませんけど。

結局、私学を誘致するとか、大谷大を四大化するというのも全部こけてしまって、今は宙に浮いているんですが、おそらくこれはうちが独法化を成し遂げたらその後の重要な課題になってきますよね。地域からは要請がくるけど、ただ、うちの大学の全体の今の雰囲気としては、専門外の学部をつくって地域に貢献するようなことを考えているのはごく一部でしょうね。きっとね。

大嶋　先ほど別科に関して地元の評価が高いという

お話があったんですが、別科の修了生の方が帯広の農業にかかわって、高い地位を占めているということで、具体的に大学とその方たちとのフィードバック、連携みたいなものはあるのかということと、もう一つは、就職問題なんですが、別科はどうか分からないんですけど、帯広畜産大学は道外出身者がとても多いということで、社会に評価される研究教育は地元の期待にこたえるという意味もあると思うんですが､道外出身者が多い中で、学生に対する就職支援を行っているのかどうかをお聞きしたいのですが。

渡邊・小池　難しい質問ですねえ…（笑)。

小池　別科の卒業生に関してなんですけれども、5，6 年くらい前までは、ほぼ農家の息子さんたちが入ってきていて、実家へ戻ったり、後は 2 年終わってから海外に研修に行って戻ってきて、実家をついだりというのが多かったです。ただ、最近はその形態が変わってきまして、半分以上は一般企業に就職、もしくは、この言葉はよくないかもしれないですが、フリーターというかたちになる、ここ本当に 5，6 年前までは 100%就農だったんですが、最近その形態がくずれてきています。

渡邊　卒業生と大学の間のフィードバックは制度的にはないですね。

小池　同窓会はあるんですけれども。

ただフィールドとして、先生方で、僕もそうなんですけど、農家を実際にまわっていろいろと試験をやったり、調査したりということをしています。先生方はやっぱり、別科に限らず、卒業生で就農しているところを使わせていただいて試験はしています。僕も今実際 4 件ぐらいまわっているんですけれども、そのうち 2 軒は卒業生です。どちらかと言うと、大学の方は面倒見てもらっていることはたくさんあるけど、大学の方から卒業生の就農に対していろいろサポートをするということはないですね。胸を張ってしていますと言えることはないです。

卒業生の就職先

渡邊　同じように、学部学生の就職についても、これは国立大学はわりとどこもそうだと思いますが、そんなに力を入れて就職の支援をしてないですよね、みんな勝手に就職すればいいという姿勢はすごく強いと思います。それも同じですね。就職に関してはほとんど研究室単位でやっています。就職のあっせんとかって、求人もかなり多く研究室に配られて、教授の先生にくるんですね。専門分野の企業とか、そういったところからの求人は研究室にくることの方が多いんです。ですから、就職のいい研究室、そうでない研究室はあります。それが学生の人気とほとんど一致しないのがおもしろいですね。

光本　人気とは一致しないんですか。

小池　一致しないですね。就職のいい研究室が学生に人気があるということはないですね。

獣医の方はだいたい 100%が就職しますが、畜産は、今は 3 学科なんですけれども、210 名で、就職希望者がだいたい 70%、30%から 20%が大学院。就職希望者 70%のうち、就職できるのが 70～80%。全体の数で言ったら半分です。就職の分野では、農畜産、食品関係に 30%から 50%くらい。ここ数年、ちょっと厳しくなっています。専門関係には 30%から 60%くらいが就職します。全体の 1～2 割くらい、卒業生全体の 2 割くらいが専門分野に就職するという感じです。そのくらいにすぎないんですよ、逆に言えば。

もっとみんな農畜産関係がいると思うでしょ。なんでそんなにいないのか。日本の農業、畜産業がどんどん縮小しています。それもさっきの別科の就農と一緒で､やっぱり就職が厳しいですよね。だいたい農畜産と食品関係に、10 年くらい前は 80%くらい就職していたんですけれども、それが 30 に落ちて､ですから逆にいうと農畜産関係でないところに就職する学生がものすごく多くなっているんです。そこでやっぱり、農畜産の専門教育だけじゃなくて、一般常識もあって、教養のある学生を育ててくれというようなことも言われるようになってきたんです。だから、牛、馬のことだけ教えてればいいわけではなくなってしまった。

ちゃんとした統計は取ってないんですけれども、うち、80%が道外から来ているんですけれども、だいたい半分はこっちに残るんですね、道内に。で、だいたい感覚としてですけれども、半分は実家の方に戻る。およそそのくらいですね。

光本　吸い寄せて、やや定着させるという。

小池　帰りたくないという学生はいます（笑)。

農業高校とのかかわり

滝ヶ平　先ほど農業高校の話が出ていたんですが、教育面でのかかわりというのは帯広農業高校とは

どのくらいあるんですか。

渡邊　教育実習では毎年 6～7 人を受け入れていただいています。昭和 30 年代には畜大だけが特別に 20～30 人も受け入れてもらうということもあったそうですが、最近はほかの農業系大学と特に変わらない扱いだと思います。その他には教員の教育交流とか、学生や生徒の行き来というのは、農高の馬術部の生徒がうちの馬場で練習するとか、吹奏楽部に農高の生徒がエキストラで参加するとかのごく少数をのぞいて現在はないです。

小池　ただ、うちの大学で、農業高校の先生方に最先端の専門を教えるという研究会が、年１回は開かれているんです。

渡邊　それも帯広農高を対象にしただけじゃないですからね。

小池　全道を対象に。

渡邊　だから、今一番あるとすれば、農高の学生さんがうちの生協に飲み物を買いに来る（笑）。本当にそうなんです。それも外から見たら意外ですよね、隣にあるのに。

　農高にはあってうちにはない設備とか、逆とかはいっぱいあるんですよ。だから、かなり意識しているんですよ。ただ、正式な教育協力というのは、まあ、ゼロですね。だからそれは将来的には、やれる方向で考えなくちゃいけないと思っていますが、今ないですね。

小池　実習面に関しては連携したりした方が、むこうにもメリットがあるし、こっちにもメリットがある。

姉崎　農業高校の先生はけっこう畜大から先生になるんですか。

小池　けっこう農業高校の先生になりますね。帯広農高にも卒業生が数人います。

姉崎　そういう人達のネットワークというのはある。

小池　それはあると思います。今、農業高校の先生方も制度が変わったのか、在職したまま大学院でもあずかれます。今、何名か農業高校の先生が大学院にいます。

渡邊　それとあと、農業高校の実習助手の先生が実習教員になるための教職教育を受けるというのもあって、今年は１人そういう先生がいます。そのくらいです。そんなに積極的にやっているわけではないです。おかしいよね。

滝ヶ平　私もそれはおかしいと思って。けっこうそれも目と鼻の先ですよね。

渡邊　まあ、難しいというか、経緯からいうと向こうの方が先にある。伝統からいえば、帯広農学校というのは、大変な 80 年の伝統があるところで、要するに、うちを頼る必要なんかないんです。普通に考えたら、高校が大学を頼って、大学のいろんな設備とかを使わせてもらってみたいなのだったら、そういうのが成り立っていればスムーズなんですけれども、帯広農業高校というのはそんなやわなものじゃなくて、自立していて、昔からあって、畜大なんて後からできた、土地も少しやったんだ、くらいなものなのです。本当にそうなんです。だから、向こうから頼まれるなんてことはないし、今までの国立大学のスタンスから言って、こちらからわざわざそんなの行ってなんてないし、というので、ずっとそのままだったんです。

　ただ、多分向こうも、それじゃいかんと思っているはずなんですよね。だから、接点ができれば、実現できることはいくらもあると思うんですが、今のところ何にもできてないんです。

姉崎　先ほどの別科の関係で言うと、市町村立の農業高校の方が、熱心な先生がいらっしゃって、ネットワークを含めて実践的な農業後継者の養成をしているが、道立高校の方はその点ではそれほどでもないと聞いたんですが、それは正しいんでしょうか。

小池　どうでしょうね。

姉崎　士幌なんかはそういうことを聞いたりしたんですが。

小池　かかわってないから、分からないですね。

光本　それは、個人的なレベルでそういうことをやっていらっしゃる先生もいるという。

姉崎　というか、確か、田嶋先生という昔いらっしゃった先生がそういうネットワークをつくっておられたと。

小池　先ほどお話したのは田嶋先生がつくられたんです。

姉崎　ええ、そうですよね。

光本　その先生のご努力。

小池　それがずっと続いていて、今、農業高校の先生方とのネットワークもあるんだと思います。

姉崎　だから、外からの要求で門を開けるというよりは、むしろ、畜大内部の中で積極的に外に出てという、その辺は大きいなと思ったんですけれども、入試の関係でミスマッチがあるとうかがったんですけれども、そういう後継者の人が入れない

という。

渡邊　地域の理科の先生と連携して、いろいろ大学のネットワーク利用してもらったり、いろんな講演会をやっているところはやっている。少しずつはやっているんですよ。だから、これからは大学の方からいろいろやらせてくれと言ってやらせてもらうようになりますから、5 年後くらいに聞いてくれれば何かあるかもしれません（笑）。

地域共同研究センター

白取　ここ数年、総額資金による外部資金の受入額は、あまり件数も増えてなくて、ただ、受託研究ですとか、共同研究になりますと、金額はあまり増えてないようなんですけれども､件数はかなり、受託研究でしたら 2 倍から 3 倍、共同研究でしたら、ここ 5 年で 6 倍くらいに増えているとうかがっておりますけれども、これはやはり地域との連携が高まっているということなんでしょうか。

小池　地域の窓口は地域共同研究センターなんですけれども、もちろん地元の企業からの要請で、あと、うちももちろんなんですけど、農家の方々の困った相談などもあそこが窓口になっていますので、実際そういう方々はあんまりお金は出せないんですけれども、こういうこと調べてほしいということで、今まで畜大は、そういうかたちでオープンにしてなかったので、そういう問い合わせを含めて件数は多くなってきています。

渡邊　先ほどもありましたけれども、総額は増えてはいないですけれども、金額的にはいまだに半分以上、外部からの受け入れ資金の半分以上は奨学寄付金になっています。共同研究は、ここにある記録ですと、平成 9 年に 14 件だったのが、平成 13 年度は 81 件になっていますし、共同研究はすごく増えています。

　増えた一つの理由はやっぱり、地共センターができて、受け入れ窓口がはっきりしたことがすごく大きいと思います。さっきありましたけど、これまでの研究室単位で受け入れている共同研究というのはたくさんあったんですけれども、それが大学としてここで受け入れるよってことを明確に、ホームページなんかでもかなりはっきり出して、宣伝もしました。ですから、今まではルートがもともとあるような共同研究しか入ってこなかったのが、これはどうかというのが入きたときに、地共センターの業績がすごく大きいのは、その先生



たちがそれをがっちりつかんで、研究になるまでかたちをつけることに意欲をもってやってくれたことですね。昔だったら、海のものとも山のものともつかない話があったって、そんなのやらないよといえばよかったんだけど、それをいわなくなったということで、受け入れられるものはみんな受け入れられるようになった。けっこう小さなものをたくさんやっているんですよね、

小池　共同研究 81 件というのは、件数で言ったら少ないんですけれども、教員 1 人当たりの件数でいくと日本一なんですよ。地共センターは、だいたい工学部に附設していますよね、でもうちの大学は農学系なんで、農学系の地域共同センターというのはほとんどなくて、その中でそういう数値を出せたというのは、やはり地域共同研究センターのスタッフ、先生方が非常にがんばってやってくださった結果だと思っています。

姉崎　北大でも、外部資金の依頼は、学部によって全国型と地域型に別れるようですけれども、畜大の場合は地元の、道内あるいは十勝管内が多いですか。

渡邊　比率からいえば道内部が多いですけれども、全国規模、東京とかのもかなり入っています。7 : 3 ということはないですね、4 とかあるかもしれないです、全国規模のが。あとで地共センターも見学行けると思いますけれども、実際には、地共センターの中には研究、実習するための設備も少しだけだけどつくってあります。研究場所の提供というようなかたちの協力もできています。

運営諮問会議

白取　運営諮問会議が、平成 14 年になって任期が終わりまして、新しいメンバーになられたと思うんですけれども、前回 7 人から今回 11 人という

ことで、4 人増えまして、その中でも前回は割合帯広畜産大学に近い、十勝中心の人材が多かったと思うんですけれども、それ以外の人材が今回 4 名入られたという意図は何か教えていただけたらと思うんですが。

渡邊　決めた立場じゃないから確かなことは言えませんが（笑）、やっぱり大学全体の目標のシフトというのはありますね。特にドイツの先生が入っているのは、国際貢献、国際交流というのを一つのうちの大学の目玉にしていく。これは今の学長もそうですし、そういう方向性はすごくとっています。

今後は教育内容でも、今は学部の教育の中では、特に国際貢献に重点に置いた教育はしていないんですけれども、例えばユニット改編していくときに、国際貢献中心にしたユニットみたいなのつくろうという案も出ていまして、そういう点で、国際協力の関係というのは理念的にあります。

それから、もう一つは、地域外、道外から見たうちの大学のあり方というのはすごく問われているわけですよね。生き残りということ考えたときにも、十勝から見たときによければ生き残れるのではないんですよね。そういう意味で、前の、今もその色彩は強いですけれども、運営諮問会議をもっと意味のあるものにしていこう、もちろんそこに選んだ先生方の人脈も欲しいわけですよね。

そういう意味で、実務型というか、本当に何かをそこでやる。ただ年に一度集まってもらって接待するだけではないようなものにしようという意思はすごく強く働いていると思います。